

Title	天皇系譜と古事記の構造：潜在する叙事詩
Sub Title	
Author	田島, けい子(Tajima, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1987
Jtitle	三田國文 No.8 (1987. 12) ,p.35- 51
JaLC DOI	10.14991/002.19871200-0035
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19871200-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

天皇系譜と古事記の構造

——潜在する叙事詩——

はじめに

『古事記』に記された天皇系譜をどう捉えるか、それは古事記研究の中核を成すものとして、様々な研究が重ねられてきた。その中で、歴史学の井上光貞氏や直木孝次郎氏、国文学の吉井巖氏等によって行われてきた、異なる研究分野間の交流と相互影響をふまえた研究活動は、特に注目に値する⁽¹⁾。

井上氏や吉井氏は、かつて万世一系の思想の発現とされた天皇系譜の中に、人為的操作を見てとり、各々独自の方法で系譜の修整を試みられた。その結果、井上氏は応神実在説を採られ⁽²⁾、吉井氏の方は仁徳期の由来を前王朝に繋ぐ目的で応神を虚構したとされた⁽³⁾。また直木氏は、応神と仁徳とは実は同一人物であるという、独特な説を提出されている⁽⁴⁾。他にも、両天皇共に存在を肯定しながら、二人は親子ではなく二つの王朝が並立していたという、田辺英治氏のような立場もあり⁽⁵⁾、さらに水野祐氏や江上波夫氏等の論も加わって、特に応神をめぐる論議は、古事記研究史上でもまれに見る盛況を呈してきたと言えよう。

田島けい子

しかしながら以上の論議は、主として歴史学の立場から提起され、つまり日本の四世紀や五世紀という「空間と時間」の実態が研究上の主人公であって、『古事記』はそれを探るための素材としてしか位置づけられていないのである。その傾向は、国文学者吉井氏の方法の中にも、少なからず伺えるかと思われる。だが、文学研究の対象はどこまでも言葉であり文体である。文学研究の側からすれば、『古事記』は何よりもまず一個の文学作品として、それを読む者の前にたち現われる。だから私は、作品(叙述)の内部構造そのものに焦点をあてて、その作品が訴えかけているメッセージを把握することに、意を注ぎたいと思う。テキストの外部にある科学的根拠(例えば古墳)を援用して、テキスト上の虚実について解釈することはひとまず棚あげにし、『古事記』に登場する天皇達がそのままでの名でそのままの姿で、四世紀や五世紀の日本に呼吸していたかどうかについても、一応問題の外のこととする。彼らは、『古事記』という「作品」の中に確かに存在しており、編纂者の意識的な又は無意識的な必然性に導かれて、『古事記』の中に各々の位置を定めている。だから、小論が改めて天皇系譜について考察する方法は、

『古事記』全体の中で各々の天皇の占める位置あるいは相互の関係を洗い直して、その意味を問うことである。つまり、井上氏が「イリヒコ」という人名の一部を、吉井氏がさらに細かく「イリ」という一要素をキーワードとして系譜を分析された、その方法は踏襲しない。

前記諸氏において、応神・仁徳の関係が様々なイメージで捉えられているのに比べ、崇神と垂仁とは、「イリヒコ系」乃至は「イリ系」として一括され、その親子関係も疑いの無いものとして受容されているようである。そして、応神・仁徳朝を五世紀の新王朝実現の反映として捉え、これと対応するものとして、崇神・垂仁朝を四世紀の王朝とされた。

しかし、一世紀古いものの方がより確実であるというのは、少々不可解な事である。さらに、人名とは一面において、最も虚構の可能性が強い存在である。事実井上氏も吉井氏も、オオタラシヒコ(景行)・ワカタラシヒコ(成務)・タラシナカツヒコ(仲哀)の三者の名から「タラシ」を除くと、各々「大」「若」「中」しか残らない為、彼らの実在を疑っておられる。しかし、井上氏自身を含めて歴史学の側では、この三天皇に、オキナガタラシヒメ(神功)を加えて、天武の父オキナガタラシヒロヌカ(舒明)や天武の母アマトヨタカライカシタラシヒメ(皇極)と対応させて、タラシ系天皇と呼んでいる。即ち「タラシ系」として一括した中で、実在した者と非実在と推測される者とを、区別しているわけである。それなら、「イリヒコ」や「イリ」等の人名要素を括することで、即ち信憑性ある系譜を求められることにも、何がしかあやうい点があるのではないだろうか。

例えば、吉井氏は「イリ」を尊重する余り、応神皇后もとの姿は、現表記の中日売命ではなくその姉の高木之入日売であるとされた。しかし、『古事記』は様々な中日売を登場させており、そこに特別な意味がこめられていると思われる。応神妃の一人息長真若中比売は、継体を応神の子孫として結びつける必須の存在であり、応神の孫娘には允恭皇后となった忍坂大中比売命がいる。彼女も、允恭即位に関して重要な役割を負い又強大な天皇である雄略の母として、『古事記』中でも出色の女性である。彼女達の名から地名の息長や忍坂を除くと「中」しか残らず、成務の名とそれほど変わっているわけではない。しかし、『古事記』の発想の中で、「三」という数は好んで用いられ、「中」が尊ばれている例を、例えば応神の歌の中に見ることができる。

A (略) 香ぐはし花橘は

上枝は 鳥居枯らし

下枝は 人取り枯らし

三つ栗の中つ枝の ほつもり赤ら嬢女を

いざささば 良らしな

B (略) 櫟井の 丸邇坂の土を

初土は 膚赤らけみ

底土は 丹黒き故

三つ栗の その中つ土を

かぶつく真火には當てず 眉書き濃に書き垂れ

Aは日向の髪長比売を、Bは宮主矢河枝比売を讚美する歌の一節であるが、ここで用いられている「花橘」や「丸邇坂の土」は、いづれも「中」の部分が、最も優良なものとして選ばれている。

さらに、『古事記』冒頭に

天地初めて発けし時、高天の原に成れの神の名は 天之御中
主神

と紹介される神は、高御産巢日神や神産巢日神と共に、三柱の神として扱われ、高天の原の中心の主宰神として、最も尊貴な神と思われる。

以上のことから、「中」は『古事記』の価値観と結びついた言葉であると言えよう。『古事記』中で、重要な地位や役割を担う女性が「中」を名に含むことは、彼女達が固有名詞を与えられること以上に、必然的なことで、そこに言わば『古事記』の文法がある。だから応神皇后も、高木之入日売ではなく中日売命でなければならぬ。

中日売の例でも見たとおり、古代の「名」においては、固有の存在を指すよりも、地名や年令の序列を織りこんで、出身氏族を指したり、彼らが所属集団の中で占める位置を示すことを目的としていることが多い。開化妃の意都都比売命やその妹袁都都比売命、意都命(仁賢)・袁都命(顯宗)等も、単に「兄・弟」を意味する記号に等しい。だから、現代の「名」についての意識を前提として古代の「名」を考察し、それを「実在」「非実在」の根拠とするのは、ややもすれば誤認におちいることになりはしないだろうか。

『古事記』の文章に即して読むと、先達によって「イリヒコ系」乃至は「イリ」王朝として一括にされた崇神と垂仁の間に、とうてい親子とは認められない断層が見えてくる。その彼らを親子としたのは、「万世一系のための人為的操作」と言ってしまうえば、それは文学を研究することにはならない。なぜなら、編纂者の意図

をそこに限定させてしまえば、私達を感動させるものとしての『古事記』の内実を、とりこぼしてしまふからである。およそ文学の研究とは、対象とする作品に対する「感動」があつて初めて出発する、と私は考える。「感動」を生じさせるものは、創りての内なる必然性である。その必然性の追求こそが、『古事記』の構想をうかびあがらせるだろうし、歴史的事実なり真実なりも、その彼方にはのみえてくるかもしれない。(尚、全体の系図は51頁に掲げた)

第一章 崇神・垂仁間の断層

1

『古事記』における天皇を生母の系譜で辿ると、それらが幾つかの特定のグループで成り立っていることに気づく。

初代と二代は、その生母は各々神の娘であるからひとまず除外すると、最初に登場するグループは、三代から五代までの、何れも師木(ウシノキ)の祖とされる女性を母とするものである。三代の師木津日子玉手見命(安寧)は、文字通り「師木」の名を冠する天皇であり、その子息師木津日子命の名は、単に「師木の皇子」という普通名詞に準じた名である。これらは、神武が東征の最後に、兄師木・弟師木を倒して大和に入ってきたことと直接結びつく。それ以来、天皇家に師木の影が濃いことは当然と言えよう。

ところが八代孝元になると、その外戚は、もはや地名ではなく氏名を以って現われる。穂積臣祖内色許男命が、その頂点におり、彼の妹内色許売命や彼の娘伊迦賀色許売命を妃とし、孝元は、大毘古命・開化・比古布都押之信命等を生む。又、河内青玉の娘波邇夜須毘売を娶して、建波邇夜須毘古命を生む。さらに大毘古命の子息建

沼河別命ヌマカワワケノミコトや、比古布都押之信命の詳細な子孫の名が紹介されている。

注目したいのは、これらの人々の内殆んどのが、次の開化記を
とび越えて、崇神記に直接関与していることである。

大毘古命をば高志道に遣はし、其の子建沼河別命をば、東の方あづまのあた
とまきかたちとまきかたち
十一道に遣はして其の麻都漏波奴人等を和平さしめ給ひき

と描かれるように、大毘古命は遠征の他にも建波邇夜須毘古の叛逆をいちばやく察してこれを討伐する等、大活躍である。また彼の娘御真津比売命は次の天皇を生んでおり、正妃と目される。又、孝元記には、比古布都押之信命が尾張連祖の妹や木国造祖の妹との間に、後代の権力者達を生んだことが記されていたが、崇神妃も、御真津比売命以外の二人は、やはり尾張連祖の女と木国造の女なのである。崇神記には他の妃の記載は無く、「此の天皇の御子等、并せて十二柱なり」と記される子供達の母は、全てがこの三人のいずれかであるから、崇神の後宮は、孝元記に登場する穂積氏及び尾張・木国の梓内シノノにのみ、すっぽりと擁されていることとなる。

この穂積氏・尾張・木国の梓内は、又物部氏系として一括することができる。神武記に、邇芸速日命の子宇摩志麻速命は、穂積・物部氏祖とあり、『新撰姓氏録』や『日本書紀』によれば、尾張連與津余曾アサノ（六代孝安の母の兄）は、ニギハヤヒ命の子孫である。『古事記』によれば、建御雷神の別称は建布都神であり、その横刀の名は布都御魂といつて石上神宮に収められているから、この神は物部氏系である。この神と共通の「布都」を名の一部に持ち、穂積氏の女伊迦賀色許売命を母とする比古布都押之信命が、木国の女との間に生んだ建内宿禰の本貫木国も、以後物部氏の血統を継ぐと目され

る。伊迦賀色許売命は、孝元妃として比古布都押之信命を生んだ後、開化妃として崇神を生んだわけだが、崇神に一切の天神地祇の社を定めるよう命じられた伊迦賀色許男命が、崇神母後の兄弟であることは、その名によって明らかである。更に、『書紀』に彼らが共に物部連祖と記されているのも、傍証となろう。大物主の崇りを鎮めたのは意富多多泥古であるが、神々はこの人物によって再編成され、即ち天皇の下に組みこまれ、統治されることになったのである。大毘古命や伊迦賀色許男命が代表するように、崇神の背景には、武力においても宗教面からも、一枚岩のような血族が存在し、それ故「初国知らしし天皇」と呼ばれることが可能となったわけである。

しかし、不思議なことに、『古事記』中の主流派とも言うべきこの穂積・物部の一族が物語の前面に再び登場するには、崇神から一足飛びに三世孫の成務記あるいは六世孫の仁徳記まで下らねばならず、試みに自然な年令を考慮するなら、比古布都押之信命の次の代即ち建内宿禰と一致するはずの垂仁記には、彼の影はおろかこの系統の片鱗も見えないのである。

2

系図に沿って見ていくと、崇神が二代先の孝元記に繋がっていたように、垂仁も同じく二代前の開化記に接続していることが分る。

開化妃の一人丹波大県主由基理の娘竹野比売の孫大筒木垂根王は、開化記で弟の讃岐垂根王と一括されて「此の二王の女、五柱坐しき」と記されている。垂仁記になって彼の名は再び浮上し、その五柱の中で彼の娘迦具夜比売命が垂仁妃として登場している。即ち、丹波系の系図を大筒木垂根王の時点で二ツ折りにしたとすれ

ば、前の部分が開化記であり、後の部分が垂仁記となるのである。この間に崇神記の入る余地は無い。

次に注目したいのは、開化記でその系図が当の天皇よりも肥大した姿で載っている日子坐王の人脈と、垂仁の系譜とが直接繋がったり重なったりしていることである。

垂仁記は、他の記と異質の、歌を全く交えない散文で、四つの短篇から構成されている。

(1) 沙本比古の反乱と沙本比売の悲話

(2) 沙本比売の遺児品牟都和気命の物語

(3) 醜くさを恥じて自殺した円野比売

(4) 常世の国へ渡り橋を求めた多運摩毛理

ここに登場するサホビコ・サホビメ・ホムツワケ・曙立王と菟上王・米羽州比売命とマドノヒメ・タヂマモリ等、各篇の主要人物全てが、日子坐王の縁者である。垂仁妃サホビメは日子坐王の娘であり、彼女の死後太后となったヒバスヒメは孫娘である。さらに日子坐王妃の一人山代刈幡戸辨は、垂仁妃刈幡戸辨(山代大國淵の娘)と同一人物と考えられるから、日子坐王の妻・娘・孫娘の三代に渡る者が、揃って垂仁の妃ということになる。そして他の垂仁記に登場する人々も全て、開化記に示される日子坐王系の枠内に、すっぽりと包みこまれてしまう。

刈幡戸辨と日子坐王の孫の曙立王と菟上王とが、ホムツワケ物語の副主人公であり、その妹弟刈幡戸辨は倭建命の妃の母である。だから、ホムツワケや倭建命の物語の素型を、姉妹の親山代大國淵の一族の周辺が管理していた可能性は、大きいと思う。この繋がりを枠として読む時、生れおちてすぐ母を失ったホムツワケが飛翔す

る鶴を求めた姿に、倭建命の化生した八尋白智鳥を追い続けた布多運能伊理毘毘命の面影が重なってくる。

是の御子、八掌鬘心の前に至るまで真事登波受。故、今高往く鶴の音を聞きて、始めて阿芸登比したまひき

ホムツワケはこのように形象され、またフタヂノイリヒメは、次のように描かれる。

其の小竹の刈杖に、足跡り破れども、其の痛きを忘れて哭きて追ひたまひき

彼らが共に垂仁の子であるだけでなく、ここには喪失と悲傷の共通したトーンがある。

また、垂仁記の地下には、出雲神話の影が透けて見える。前述したホムツワケの形象は

「僕は妣の国根の堅州国に罵らむと欲ふ。故、哭くなり」と

と言って「八掌須心の前に至るまで、啼き伊佐知伎」というスサノオとその面ざしが一致し、さらに、

大神大穴持命の御子、阿遲須積高日子命、御須髪八握に生ふるまで、夜昼哭きまして、み辞通はざりき

と出雲風土記の伝えるアヂスキタカヒコ神の挿話に酷似していることは、周知の通りである。次に『新撰姓氏録』を見ると、彦坐命の後裔として鴨県主を挙げ、この氏は賀茂県主と同祖であり、神武を先導した八咫鳥は、その祖で、神魂命孫鴨建津見命であると記されている。つまり、日子坐王はカミムスヒ神の子孫であるとする伝承が在るわけで、ホムツワケ物語も出雲神話のバリエーションとして、日子坐王周辺で生誕したと推量し得る。

垂仁記のホムツワケは、崇神記では大物主と呼ぶ神を葦原色許男

神と呼ぶ。この神をその名で呼ぶのは、『古事記』の中では、スサノオやカミムスヒ等出雲系と目される神々だけである。ここにも、垂仁記と崇神記が異質の世界である証拠を見ることができよう。

崇神とその一族の背後には、ニギハヤヒ神が居り、垂仁とその縁者の源には、カミムスヒが見えがくれているのである。

日子坐王の子孫は、各々丹波や山代の地名を負っていて、その勢力の範囲を示していると思われる。彼は丸邇臣祖オケツヒメを母とし、叔母ヲケツヒメを妻とするから、丸邇氏と幾重にも縁のある皇子であって、ヲケツヒメの子山代大筒木真若王は、山代を本貫とする丸邇氏の嫡流と思われる。彼は姪の丹波アジサワヒメと婚しているが、彼も開化の孫に当るわけで、前述の開化孫大筒木垂根王も丹波系であることを重ねると、この二人は同族乃至同一人物の可能性もあり得よう。さらに日子坐王妃の一人沙本大閼見戸売(垂仁妃サホビメの母)は春日の出身であって、丸邇氏の別れである。つまり、開化記と垂仁記とに現われる人々のほぼ九割が、丹波・山代・春日の地名と結びつき、丸邇氏と関係の深い者なのである。

3

このように、崇神と垂仁とは、親子とするのがためらわれる程、彼らの背景及びその後宮と外戚とが異っている。前述のように、井上氏や吉井氏は彼らの名「イリヒコ」を共通項として一括されたが、表記を見ると、崇神の方は「入日子」であり、垂仁は「伊理毘古」である。又、崇神の子孫で尾張系の皇子皇女は、八尺入日子命・八坂入日売命・五百木入日子命と、いずれも「入日子・入日売」であるが、垂仁の娘で倭建命妃となった山代系皇女フタダノイリヒメ「は伊理毘売」と表記されている。この辺からも、崇神と垂仁の

伝承が、尾張系・山代系の異なる氏族の資料からべつべつに採録された可能性があると思われるのである。

崇神記には孝元記が、垂仁記には開化記が、各々前史のように置かれていたのだが、それは又、各々長命の天皇の前に比較的短命の天皇が配されており、シンメトリカルな構成になっている。ここで留意しておきたいのは、孝元記では建内宿禰の系図が、開化記では日子坐王の系図が、各々皇統ではないのに詳述されている点である。しかも、前者は仁徳妃の父及びもつと後代の天皇記に登場する氏族の祖(平群は顕宗の代、蘇我は欽明の代)まで下降し、後者では応神の母息長帯比売まで説明してしまっている。その詳細さと超時間性とは、かなり主観的なメッセージがこめられていると思われる。例えば編年体の史書にとって、事件は時を刻むものとして採用され、関心の的は各時代／＼の姿そのものである。ところが『古事記』の記述の態度は、時代を一つ一つ追うのではなく、時間を越えて発現するある特定ものを語ろうとする意志がある。この開化記には特に、古事記の意図が匿しようもなく現われている。即ち、ここで一気に五代後の仲哀妃息長帯比売命の名まで語りきってしまうところに、応神について語ろうとするまたは語らねばならないという、異常な熱意が伝わってくるのである。

但し、『古事記』の構造は、応神に辿り着く以前に、どうしても景行を避けて通れなかった。それは『古事記』の最も強い必然性として、第三の世界を抱えこんでいたからである。

第一章で扱った天皇系譜の二つの流れの内、丸邇氏祖の女を母と妻に持つ日子坐王から発し、丹波と山代の地を縫うようにして流れ、垂仁・(景行)・仲哀・神功・応神へと続く系譜を、今仮に『丸

邇氏系皇統」と呼んでおく。一方、「初国知らしし天皇」と称される崇神を頂き、尾張の血を代々注入して景行太子五百木入日子命や応神皇后中日売命を輩出し、やがて仁徳に達する流れを、これも仮に《尾張氏系皇統》と名づけておく。

第二章 景行記の構造

1

景行記の系図は様々な側面を見せる。多種多様な要素を抱えこみながら、全体としては破綻してしまっていると言えよう。⁽¹¹⁾

景行は垂仁皇后ヒパスヒメ命を母とするから、山代と丹波の純血性の結晶のような正統的丸邇氏系天皇である。それにも拘わらず前章の《丸邇氏系皇統》に括弧つきで記したのは、彼の正妃に目される八坂入日売命が尾張氏系であるというだけでなく、景行記に見える景行の横顔が、尾張系の方に向いているからである。そして、彼が針間伊那毘^{イナビ}郎女との間に倭建命を生んでいることが、景行及び景行記の複雑さに拍車をかけている。

針間伊那毘郎女はその父の名によって孝霊の孫に位置づけ得るが、彼女が孝霊五代孫の景行妃であるのは、些か異常である。叔父と姪、叔母と甥の結婚は異世代婚と呼ばれ、『古事記』に頻出するが、景行の場合は言わば曾祖母の代に当たる女と婚しているわけである。仮に、天皇が孫よりも若い妃を娶うことはあり得るだろう。しかし、三世代上の女性との間に子供を生む必然性も可能性も、あまり無いのではなからうか。

しかし、この孝霊・孝元・開化・崇神・垂仁・景行という皇統から、尾張系列の孝元と崇神を除くと、世代の異常さは消失する。前

章では、孝元・崇神と開化・垂仁とが互いに一代隔てて組み合わされていることを述べたが、孝霊はさらに一代隔てて、開化・垂仁のグループに加わっていることになる。

針間伊那毘郎女を中心として修正したこの系図を眺めると、倭建命系譜の主要な特徴として、吉備との縁の濃さが浮かんでくる。

『古事記』によれば孝霊は七代目の天皇であるが、この孝霊記から『古事記』の記述に変化が見られる。即ち、この記から初めて妃の数が複数になり、子女の消息も詳しくなる。孝霊の皇子達は、各々針間・吉備・高志・角鹿の豪族の祖であり、倭建命や後出の応神や仁徳の物語と関係の深い一族である。

大吉備津日子命と若建吉備津日子命とは二柱相副ひて、針間の水河の前に忌菟^{イハヒ}を居多て、針間を道の口と為て吉備國を言向け和したまひき

こう記された若建吉備津日子命の娘が針間伊那毘郎女であるから、彼女はこの遠征の延長上に生を享けたことになる。また『播磨風土記』では、彼女は吉備比売と丸臣比古汝茅^{ヒコニヤ}の娘となっており、いづれにしても吉備の血統をひく女性であったことになる。

また彼女の父の名と、倭建命の妃の一人である大吉備建比売の兄吉備臣建日子は、同一人物かとみまごう程近似した名を持つ。こうして、母と妻の両方の縁において、倭建命は吉備・針間系の皇子として位置づけられる。

倭建命が熊曾建・出雲建を討代して帰遷した時、父の景行天皇は彼に休む暇を与えず

「東の方^{あづまのあた}十二道の荒夫^{あぶら}琉神^{りゅうじん}及摩都樓^{まどろう}波奴人^{なみのり}等を言向^{ことむ}け和平せ」とのりたまひて、吉備臣等の祖、名は御鋸友耳建日子を副へて

遣はしし時、比比羅木の八尋矛を給ひき

この直後、倭建命は伊勢の大御神の宮に参内し、斎宮である姨の倭比売命に愁訴する。

「天皇既に吾死ねと思はず所以か、何しかも西の方の悪しき人等を撃ちに遣はして、返り参り來し間、未だ幾時も経らねば、軍衆を賜はずで、今更に東の方十二道の悪しき人等を平けに遣はすらむ。此れに因りて思惟へば、猶吾既に死ねと思はし看すなり」とまをしまひて、思ひ泣きて罷ります

ここには普遍的な悲しみの情が溢れていて、倭建命の人間性と共に『古事記』における文学的達成の一つとして、古来多くの人々に愛されてきた。但し、倭建命の置かれていた政治的状况を考慮すると、この言葉には、より逼迫した事情が絡んでいるのである。

景行の三太子の中で、倭建命以外の二人は尾張系の八坂入日売所生の皇子（後の成務と五百木入日子命）である。先に、倭建命は父天皇の教唆ともれる言葉を受けて、双生児の兄大碓命を殺害している。そして今度は、度重なる戦いに疲弊した倭建命を再び苦しい戦いに追いやるとうとしている。然も「軍衆」も賜わず、彼に与えられたのは彼の同族の吉備臣御鋌友耳建日子だけであった。つまり、景行の朝廷で彼は全く孤立していたのである。それは、大碓命の事件も含めて、天皇の意が尾張系太子の上にあることを意味する。

「天皇既に吾死ねと思はず所以か」

これは、自らの立場を認識した倭建命の悲痛な言葉である。

倭比売命だけが彼の庇護者であったことは、彼らが共に『丸邇氏系皇統』と繋ることから、当然と言えよう。ニギハヤヒ神の末裔で

ある尾張系の皇子達を、垂仁皇女で伊勢斎宮である彼女が、受容できるとはならない。

2

景行がなぜ吉備氏を抑え、尾張氏に近づいたのか。その理由の一端は、例えば『播磨風土記』の次のような一挿話によって、伺うことができる。

倭建命の母を妻問おうとして、景行は河の渡し守を召すが、何と拒絶されてしまふ。

度子紀伊の国人小玉申さく「我は天皇の贖人たらめや」とまをす、その時刺りたまはく「朕公、然はあれど猶度せ」とのりたまふ。度子對へてまをさく「遂に度らむと欲さば、度の賃を賜へ」とまをす

こうして、天皇は結局光輝く弟縵を賃として与えて、漸く河を渡ることができぬ。

一介の渡し守の「我は天皇の贖人たらめや」という昂然たる言葉の背景にあるのは、何なのか。天皇の方もまた、「朕公、然はあれど猶度せ」と相手の言葉を肯定しながら、下手に出ている。彼らが、他の渡し守でも他の天皇でもなく、片や紀伊の国人であり、片や景行という丸邇氏系天皇であるところに、その根拠があるのでないだろうか。つまり、この時期木国は、丸邇氏系天皇の勢力圏外に在ったのではないだろうか。同時にその木国と関係の深い尾張氏は、その祖先に「初国知らしし天皇」を頂き、皇位に対しては丸邇氏よりも先行する氏族として優位を保ち、皇位継承権において他のどの氏族より優先的な立場を主張し得たと思われる。母方言えば丹波系の景行が自らの勢力を補強するためには、吉備氏よりも尾張

氏へ歩み寄る必要があったのだ。

そして、倭建命が尾張国造祖美夜受比売と婚したのも、同じ理由からではなかったか。彼は吉備系の皇子として、尾張系太子の兄弟に対抗するためには、尾張氏一族の支持をとりつける必要があったと思われる。

しかし、草那芸劔を美夜受比売に托したことは、確かに比売の一族の信頼を得たであろうが、これは彼にとって大きな誤算であった。草那芸劔は出雲神話の中から発祥し、天照大御神に献上され、天孫が降臨に際して授与され、以来伊勢神宮によって守られてきた剣である。彼にこれを与えたのは倭比売命であった。草那芸劔は、まさに山代・丹波系皇統の象徴であった。それが異なる系列の神であるニギハヤヒと系氏族に渡った時、それまで彼を英雄たらしめていた祖先の神の加護も、失なわれたのである。

この直後に、彼は伊服岐能山の神を取りに行き、その神に言挙げしたことで神の怒りを買う。神は「大水雨を零らして、倭建命を打ち惑はし」た。ここから倭建命の臨終まで、歌を畳み掛けるように介在させながら、物語は一挙に進む。

嬢子の床の辺に我が置きしつるぎの大刀その大刀はや
この辞世の歌には、倭建命の痛恨の思いが吐露されている。なぜなら、ここに現われる詠嘆は「その大刀はや」であって、「その嬢子はや」ではないからで、歌の中心は「嬢子」ではなく、「その大刀」にあるからである。

さらに、倭建命を見放したのは、祖先の神々だけでなく、祖先以来の人々でもあったと思われる。彼を打ちのめした伊服岐能山の神とは、かつて彼が殺害した兄大碓命と関係のある神であった。大碓

命が景行から横どりした兄比売と弟比売の父は三野国造大根王であり、開化記に出てくる日子坐王の子神大根王（三野国木本国造祖）に繋る人物と目される。大碓命が兄比売弟比売との間に生んだ子供達も、各々三野国造と記されている。つまり近江と三野の境にある伊服岐能山一帯は、神大根王以来の三野国造の本貫であり、人々は日子坐王の子孫であったのだ。この一族の婿である大碓命を倭建命が殺害し、彼自身は大碓命由縁の地で遭難したことには、何がしかの暗合があるのではないだろうか。

3 以上のように、景行記の物語の主人公は天皇ではなく倭建命である。開化記の系譜では日子坐王の占めた位置を、景行記では物語において彼が占めていることになる。

倭建命の子孫は、景行記の終りの方に詳述されている。景行の帝紀は、景行に於ける「現時点」の關係しか記さないが、倭建命系図では三代孫で応神妃の息長真若中比売まで紹介されている。つまり、ここでも編年体の体裁が突然に捨てられ、応神へ性急に繋っていくようにしている。

但し、倭建命から応神へ続く系譜は、先日子坐王から応神へと繋げてきた系譜とは、別種のものである。この二つの流れを、先例に倣って前者を《吉備・針間系丸邇氏》、後者を《山代・丹波系丸邇氏》と、仮に呼んでおくこととする。

第三章 応神記・仁徳記の主題

1

応神記には、前章で述べたように様々な流れが混流しており、記

全体の構成も未整理であると思われる。帝紀以外に天之日矛の系譜が挿入されていたり、物語末尾に突如として応神四代孫の允恭妃や、その兄で継体の曾祖父の名を挙げていたりする。

但し天之日矛の系譜は、溯って応神の母神功の母系を述べており、祖先の一人多遲麻毛理を介して、垂仁記に結びつく。応神の父仲哀の母は垂仁皇女であるから、応神は父系においても母系においても垂仁記と密接な関係にある。この両親の系譜を別々に溯っていても、結局日子坐王に辿り着く。仲哀は倭建命の子であるから、そこから吉備系の血が注入しているものの、応神は紛れもなく《山代・丹波系丸邇氏》の天皇である。そのことは、仲哀記・応神記で語られる彼の生涯においても、明らかである。

応神は、皇位継承戦争を異母兄忍熊王との間で行った。忍熊王の系図を溯ると、淡海の柴野入杵の娘柴野比売がおり、彼もまた山代の勢力を背景とする皇子であったと思われる。この出自を念頭に置いて、忍熊王の最後を語る文を読む時、それらが呼応してすぐれた効果をあげていることが分る。

故、逢坂に逃げ退きて、對ひ立ちて亦戦ひき。爾に追ひ迫めて沙沙那美に敗り、悉く其の軍を斬りき。是に其忍熊王と伊佐比宿禰と、共に追ひ迫めらえて、船に乗りて海に浮かびて歌日ひけらく

いざ吾君 振手負はずは
鳴鳥の 淡海の湖に 潜させなわ

とうたひて 即ち海に入りて共に死にき

ここには、敗者への鎮魂の響きが滲んでいる。逢坂・沙沙那美と、忍熊王が逃げ退いて来た近江国、彼が入水した淡海の湖、それ

が彼の祖先の地であったからである。

忍熊王を討った応神側の將軍建振熊命も丸邇臣祖であるから、この継承戦争は、実は近江一帯の丸邇氏一族間の争いだったとも言える。この戦いの後、建内宿禰は太子であった応神を率て、淡海から若狭国を経て、高志の前の角鹿に仮宮を造った。

矢河枝比売との聖婚の際、応神が彼女に贈った歌は、このような応神即位の前史と聖婚の現在とを凝縮したような言葉に充ちている。

この蟹や何處の蟹 百傳ふ角鹿の蟹
横去らふ何處に到る

と始まって、角鹿・佐佐那美・木幡・櫛井・丸邇坂と畳みかけられる地名は、高志国、近江国、山城国等であり、そのまま応神即位までの過程を反映しており、そしていずれも丸邇氏有縁の地である。

応神の両親の始祖は、山代を本貫とする丸邇氏（丸邇臣ヲケツヒメの子山代大筒木真若王の嫡流）である。その裔に当る応神が、山代は木幡の地で丸邇之比布礼能意富美の娘と婚したことは、応神が祖先以来の同族との連帯を強めたということである。だから、その丸邇氏の女との間に生まれた子を、応神が後継者に指名したのは、決して「弟の子は未だ人と成らねば是ぞ愛しき」という親の煩惱にのみ依ったのではないと考えねばならない。この後継者指名が、いかに重要なモチーフであるかは、この記事が、応神記の冒頭に置かれていことから推量できる。

成務の後に、成務自身の子や同母兄弟五百木入日子命の子品陀真若王をさしおいて、倭建命の子である仲哀が即位したのは、大臣建内宿禰の主導によるものであった。仲哀と神功は、まるで夫婦養子

のようなかたちで、建内宿禰の後見する倭朝廷に迎えられた。しかし、建内宿禰の意が仲哀の上になかったことは、仲哀の頓死があったかも知れないように描かれ、仲哀の皇子忍熊王が迫め滅ぼされたことと何える。建内宿禰は仲哀の死因を神に請い、「生剝、逆剝、阿難、溝埋、尿戸、上通下通婚、馬婚、牛婚、鶏婚の類を種々求ぎ」という。しかし、仲哀の死因を罪と結びつけようとすることは、天皇の死を汚れたものとしてむしろ強調することになる。

応神はそのような建内宿禰の庇護の下に、生誕以前から皇位継承者に擬されてきた。建内宿禰の生地木国は、彼の父を介在させて尾張国と同盟関係にあり、両国は「初国知らし天皇」と呼ばれる崇神を出現させた名流である。そして応神は、崇神の四代孫に当る尾張系の品陀真若王の娘三人を妃とし、その一人を皇后とすることに よって、皇位を保証されたのであるから、応神はまるで、品陀真若王の婿養子のような立場にあった。応神の名が品陀和氣命であるのは、そのことと関係があるのではなからうか。木国・尾張グループにしてみれば、彼らの方で応神をとり籠んだのであり、期待は応神の次代、彼らの嫡流である皇子の即位にあったろう。

しかし、応神の方にも思惑があった。婿入りしたはずの応神は、皇位を婚家ではなく実家へ渡そうとする。即ち、長子の大山守命や皇后所生の大雀命（仁徳）等いづれも品陀真若王の孫であり年長でもあって、皇位継承権において優位にある皇子達を越えて、丸邇氏矢河枝比売所生の宇遲能和紀郎子を日継皇子に指名したのである。この時期丸邇氏の勢力は、対忍熊王戦の随一の戦功者の丸邇臣祖建振熊命等も控えており、応神の選択を強力にバックアップすることが可能であったと思われる。大雀命は、少くとも応神の死を待

たねばならなかった。

父の死後、この非情な皇子は密告によって弟に兄を殺させ、その弟を自ら死に追いやって皇位に即く。記紀の執筆者が儒教的なカムフラージュを施せば施す程、その文脈下に歴史的真実は透けて見えるものである。

2

仁徳記のヒロイン皇后石之日売命の父は葛城曾都毘古であり、祖父は建内宿禰である。だから仁徳と石之日売とは、崇神をして「初国知らし天皇」たらしめた強力な背景即ち木国・尾張の連繫の一環なのである。仁徳記に展開する石之日売の「嫉妬」を中心とする歌物語の背景として、このような二人の出自と今まで述べてきた前史が在ることは重要である。仁徳記とは、単に大王の愛の物語なのではなく、むしろ後宮の物語であることによって勝れて政治的なストーリーなのである。

初めに登場する吉備の黒比売は、孝靈天皇以来の由緒ある旧一族である。孝靈の皇子の一人は高志・角鹿の海直祖とされているが、この地名が応神とも縁が深いことは、既に述べた。応神は角鹿の飯宮に在った時、その地の伊奢沙和氣大神と名を替え合ってさえる。これらの条件を加えると、吉備の黒比売とは、血縁的にも仁徳に親しく王権にも近い吉備系丸邇氏の女性と目される。そして黒比売を故郷に運ぼうとした吉備の舟とは、この時代の強大な海軍であった。黒比売の出自と共にその海軍力を念頭に置いて、仁徳の求愛があり、さらに石之日売の嫉妬がある。

石之日売の逆襲によって、黒比売は這う這うの体で退散させられるが、この後の天皇と八田若郎女の結婚を、皇后の倉人女に告げ口

するのが吉備国の児島の仕丁であるところも、まるで黒比売側の竹筥返しのようである。

夫の裏切りを知った石之日売は宮に帰らず、堀江を浜り河の隨に山代に上り、岸辺の椿に夫の姿を偲び、実家への慕情を歌いつつ、結局筒木の韓人奴理能美の家に入った。この一連の行動には、彼女の切ない心情と共に聡明さが伺える。怒りのままに自家へ戻れば、葛城氏と天皇とが対峙する形になるが、帰化人の一使主のものとなれば、彼女の私的な反抗として印象が緩和される。天皇の使者も奴理能美も口を揃えて、皇后は蚕を見に来たのであって「更に異心無し」と訴えるのも、皇后の行動は、反乱に直結しかねない要素を含んでいたからである。天皇の方も建内宿禰や葛城曾都毘古と事を構える気は毛頭ないから、「然らば吾も奇異しと思ふ。故、(蚕を見に行かむ」と口実をつくって、彼の方から妻を迎えに行くという、夫婦喧嘩の仲直りとして洒落た出来上りになっている。但し、天皇に先んじて迎えに来た丸邇臣口子は、激しい雨の庭に跪いたまま、ひたすら皇后からの面会許可が出るのを待たねばならなかった。

是の口子臣、此の御歌を白す時大雨ふりき。爾に其の雨を避けず、前つ殿戸に参伏せば違ひて後つ戸に出でたまひ、後つ殿戸に参伏せば違ひて前つ戸に出でたまひき。爾に匍匐ひ進み赴きて、庭中に跪きし時、水潦腰に至りき。其の臣、紅き紐著けし青摺の衣を服たり。故、水潦紅き紐に拂れて、青皆紅き色に變りき。

まことに、宮仕えの辛さ極まれの態であるが、この役目は特に丸邇氏でなければならなかった。喧嘩の原因となった八田若郎女は

矢河枝比売の娘であり、まさに丸邇氏一族の戴く皇女だったからである。応神皇女という高い出自を持ち、一族の勢力も葛城氏に引けをとらないとなれば、彼女こそ石之日売の脅威たり得る存在であった。だから、天皇の命を受けて口子臣が皇后の前に跪いたことは、天皇の意志がどこにあるかを、雄弁に語っていることになる。丸邇氏が葛城氏の前に跪き、石之日売に恭順の意を示しているからである。こうして、仁徳は八田若郎女を不本意ながらも退出させた。

しかし、その直後に、今度は八田若郎女の妹女鳥王に求婚した天皇の真意は、どこにあったのか。彼女達は先の太子宇遲能和紀郎子の同母妹であり、その叔母袁那辨郎女と応神の間に生まれた宇遲能若郎女をも、仁徳は後宮に納れた。丸邇氏の三人の庶妹を、全て妃にしようと企てたのである。

丸邇一族の擁する皇子皇女を、暗殺と結婚とで自らの側にとり籠むことが、仁徳の政治的意図であった。誇り高い女鳥王が仁徳の意志を拒絶した時、彼女には死の運命しか残されていなかったのである。

3

はじめに述べたように、応神と仁徳の実像と関係についての議論は、多様なものがある。しかし歴史上の解釈を離れて、以上のように仲哀記・応神記・仁徳記を文脈に即してそのまま読んでいくと、そこに現われる豊かに歌を織りこんだ一連の物語は、一貫した主題を示しているのである。即ち、応神という垂仁以来の最大の天皇を実現させた山代系丸邇氏が、これも尾張系最大の天皇仁徳によって、実質的に壊滅させられる過程である。応神記が『古事記』中巻の末尾に位置するのは、そのことと関係する。

応神記・仁徳記は、皇統のいわば分水嶺であって、中巻の世界の
二大潮流であった尾張系と山代系に代って、下巻の世界を二分し主
導権を争うのは、木国系と吉備系である。だから、仁徳記の終りが
建内宿禰と仁徳との互いの祝福の歌で締め括っているのは、実に示
唆的である。

たまきはる内の朝臣。汝こそは世の長人。そらみつ 倭の國に
雁卵生と聞くや

天皇が雁卵に寄せて建内宿禰の長寿を祝い、建内宿禰もまた次の
ように答える。

汝が御子や 終に知らむと雁は卵生らし

そして、彼らがここで繁栄を祝った仁徳の子孫とは、彼の孫娘石
之目売の子供達であり、即ち彼自身の子孫である。それは、履中の
子市辺忍齒王が暗殺されることで、実質的には絶えるのだが、木国
系の覇権はしばしば皇室を圧倒するものとして、『古事記』下巻の
主調音を受け持つ。雄略に殺される都夫良意美、「凡そ朝廷の人等
は、且は朝廷に参赴き、晝は志毘の門に集へり」として、顕宗・仁
賢の兄弟に殺された志毘臣、そして、事件の内幕はもはや『古事
記』の範囲を越えて記録されるものの、天智によって殺される蘇我
入鹿等がそれである。即ち、これら葛城氏・平群氏・蘇我氏等の大
臣達は、全て孝元記において、建内宿禰の子孫として紹介された人
々である。そして天武の祖先の天皇達は、これらの皇室にとって脅
威的存在である大臣等を克服することによって、皇位を確保あるいは
継承してきたのである。

第四章 天武の系譜

1 『古事記』の編纂を命じた天武の系譜とは、つまるところ《吉備
・針間系丸邇氏》皇統である。日子坐王に始まる《山代・丹波系丸
邇氏》が応神の代で絶えた後、それまで伏流だったものが応神と結
びつくことで顕在化され、それが応神記末尾に附加されている。そ
れは、倭建命の子孫である息長真若中日売が応神皇子として生んだ
若沼毛二俣王の系譜である。この流れが允恭皇后と継体の曾祖父の
兄妹を出し、その子孫が手白髪皇女及び継体の夫婦として合流し、
やがて天武に到る。つまり天武の系譜を遡行すれば、応神は確かに
始祖的天皇の位置にいるが、女系に沿って応神を通過すると、倭建
命の系図へ直ちに接続しており、さらに邇ると孝霊に辿り着くので
ある。孝霊の弟は大古備諸進命であり、孝霊の皇子達は針間・吉備
・高志・角鹿の豪族の祖であるから、孝霊こそ《吉備氏系》の源流
に位置する天皇と言えよう。孝霊記の記述が『古事記』の中で最初
のポイントであることも、それを裏づけると思われる。さらに孝霊
妃邇伊呂泥の別名が意富夜麻登玖邇阿禮比売命という特別の名を持
ち、四代前の安寧記において早くも登場しているのは、注目され
る。それは、日子坐王や建内宿禰や倭建命の系譜を語った時と同じ
態度である。ハエイロネ・ハエイロド姉妹の父は淡道の御井宮に坐
したという。その淡道の宮が古事記の中で占める位置は重く、姉妹
の子孫が後の記で活躍しているのと重ねて、この一族は、古事記全
体の枠組みと関わる主要な氏族と思われる。孝霊記はこの両妃を介
在させて、安寧記に直ちに接続していることになる。

但し、『古事記』が記すとおりに、綏靖・安寧・懿徳・孝昭・孝安・孝霊と続けてよいかは疑問である。この系譜の中で、孝昭・孝安はニギハヤヒ系の母や妃を持ち、他の四者は師木縣主祖系の妃を持つかあるいはその名前に共通性が認められているからである。

孝昭と孝安の名は、少々異質である。孝昭の名は、御真津日子詞惠志泥命。孝安の名は、大倭帯日子罔押人命、であるが、特に孝昭と十代崇神の名御真木入日子印惠命は近似している。崇神妃御真津比売は、『書紀』では御間城比売であって、この夫妻はミマキイリヒコとミマキヒメの対になっている。ミマキヒメがミマツヒメに交替するなら、ミマキイリヒコがミマツヒコにも交替する可能性がある。カエンネ命とイニエ命の音も似ており、彼らの命名の前提に共通したものであるのではないだろうか。明らかなことは、孝昭・孝安・崇神の母や妃が尾張連祖あるいは穂積・物部氏祖であって、いずれもニギハヤヒ神の子孫だということである。これは、もともととは綏靖・安寧・懿徳・孝霊と続いていた《吉備系皇統》譜に、孝昭・孝安という異質の系譜を割りこませたと考えられる。

つまり《尾張系皇統》の側から言えば、その系譜は孝昭・孝安・元孝・崇神の順で続いていたと思われるが、このことを傍証するものとしては、『尾張氏系譜』^{補注}の世代的考察がある。『古事記』が記す五代孝昭の妃余曾多本比質と十代崇神の妃意富阿麻比売を、『尾張氏系譜』で見ると三世代の差である。つまりこちらに焦点を合わせて皇統譜を復元すると、六代の孝安と十代の崇神との間には天皇が一代しか入らない。この天皇は、第一章で述べたように崇神と緊密な構造を持つ八代の孝元と考えられる。孝元は、穂積・物部祖内色許男命の妹と娘とを妃に持つことから、条件に合う。すると、

七代孝霊と九代開化は自らこの系譜からは浮き上り、別種の系譜が割りこんでいることが分るのである。

2

天武の系譜の特徴の一つは、まるでこの系図の共通項のように、「息長」の地名を冠した人名が何代にも渡って断続的に現われることである。「書紀」によれば、天武の父の名も息長足日広額である。祖父忍坂日子人太子の母比呂比売命の父が息長真手王であり、若沼毛二俣王の母は息長真若中比売であり、その祖父で倭建命の子は息長田別王という。さらに継体即位の根拠とされたその祖先応神の系譜も、息長帯比売命や息長宿禰王を経て、丸邇氏袁那都比売もしくは息長水依比売に達する。このことから、天武の系譜を《息長系》乃至《息長氏系》と呼ぶ向きもあるようである。しかし、息長氏というものは『新撰姓氏録』にも見当たらない。天武の系譜は前述のように、若沼毛二俣王から倭建命に接続し、そこから孝霊へと抜けていくのであって、この皇統としては、必ずしも息長帯比売命や息長宿禰王を含まない。しかし、人名としては『古事記』初出の息長を冠する息長宿禰王は、丸邇氏袁那都比売の三代孫であるから、「息長」は丸邇氏であると断定してよいと思う。そして、息長宿禰王の子息長日子王が吉備・針間祖と記されていることに注目したい。日子坐王の裔が吉備へ移動した痕跡が、ここに見られるからである。「播磨風土記」に語られる針間伊那毘大郎女の両親が丸臣比古汝茅と吉備比売であることは、それと符合する。又彼女と景行の結婚を仲介したのが息長命であること等も、その辺の事情の幾ばくかを反映しているのではないか。また《吉備系皇統》譜に限って見れば、初めて「息長」が現われるのは、倭建命の子息長田別王であ

り、時期的には、この息長日子王の時代と一致するのも暗示的である。息長田別王は《吉備系皇統》においては重要な位置を占めているのに、彼の母は唯倭建命の一妻としか記されず、名も氏族名も伏せられているところにも、かえって《山代系丸邇氏》の混入を拒みたいとする《吉備系丸邇氏》の側からの要請が、反映しているのかもしれない。⁽¹⁷⁾

但し、応神の父方の祖母が垂仁皇女であり、継体の母が『書紀』及び『上宮記』に垂仁八世孫とあることから、天武の系譜には垂仁及び日子坐王以来の血脈が流れこんでおり、この皇統も広義において《丸邇氏系》と称し得る。そして、天武が丸邇氏系天皇であることが、『古事記』の始源に「高天原神話」を頂きながら、尚「出雲神話」をも抱えこまなければならなかった、『古事記』の方法と構造の理由である。

3

神武記には、『古事記』の構想が集約されている。神武記とは、日向の若御毛沼命が神倭伊波禮毘古命に変わる過程を描いている。それに関与して力あったのが、高御産巢日神とその眷属とも言うべき建御雷神やニギハヤヒ等、いずれも非出雲系の神々さらに高天原でも異色の神々である。⁽¹⁸⁾

熊野の荒ぶる神の出現で全軍が斃れた時、神武を復活させたのは、建御雷が降した横刀であった。神武が最後の戦いで兄師木弟師木を撃ちあぐねた時、「今助けに来ね」とうたうと、ニギハヤヒが降臨して、神武軍を勝利に導いた。このように、神武の大和奪還は、大伴氏や久米氏の武力以上に物部氏祖の呪的な力に負っていることを、『古事記』の記述は語っている。そして、師木を征服した

ニギハヤヒが先任の首長登美毘古の妹との間に、穂積氏物部氏を生み、この子孫によって、「初国知らしし天皇」が出現したことも語っている。しかし、この文脈で見れば、日向の若御毛沼命(天孫)の系図は、『古事記』の世界で全く登場する場を失うことになる。

しかし、天皇とは一人の国つ神としての登美毘古の征服者であるのではない。神武が国土全体の征服者であることを証明するために、彼は大物主の娘と結婚したのである。大物主の中に幾重にも畳み込まれている神話的意味によって、この神は国つ神全体の象徴として⁽¹⁹⁾の王であり、神武が担っているところの、大別すれば二つの皇統を止揚する必然性によって、神武と伊須氣余理比売の聖婚は設定された。しかし、大物主に附加されている出雲の神のイメージは、彼の丸邇氏系天皇と重なる時、天武に至る代々の天皇とは、伊須氣余理比売を通して大物主の子孫であり、仍って出雲の裔であることを可能としたのである。

結 び

以上のことから、次のように推論できる。

第一に、天皇の系譜は、まずニギハヤヒと神より発する木国・尾張系あるいは物部氏系と、出雲神話と高天原神話を始源とする丸邇氏系に大別できる。

第二に、丸邇氏系はさらに、山代・丹波系と吉備・針間系とに分類できる。

即ち、古事記の構造とは、二系三種の系統のそれぞれ各代の記が、殆ど互い違いに組みこまれて成り立っている。その結果として万世一系の大系が、『古事記』の表層に実現している。これが小論

の結論である。

しかし、『古事記』の文脈に分け入ると、三種の皇統が、無差別に交り合うことはなく、分離したまま時間軸に沿って交互に現われる。一方が絶えそうになると、混沌とした薄闇の中から他のグループが呼び出され、皇統を補強して次のグループへと仲継ぎをしていく。その動きは、あたかも『古事記』の紡ぎ出す歴史の光と影、あるいはポジとネガの関係にある。そこに現出する各氏族の消長は、皇統の興亡は、『古事記』の本質が叙事詩であることを、余すところなく語っていると思われる。

(了)

注

- 1 2 3 4 井上光貞『日本国家の起源』岩波新書。直木孝次郎『応神天皇の実在性をめぐって』人文研究25・『応神王朝論序説』『日本古代の氏族と天皇』所収・『神功皇后伝説の成立』塙書房・『天皇系譜の疑問点』東アジアの古代文化14。吉井巖『応神天皇とその周辺』塙書房・『ホムツワケ王』万葉74
- 5 『古代王朝系譜考』歴史研究97・『二つの王朝』歴史研究108
- 6 『天皇氏の系譜の成立について』解釈と鑑賞25¹⁴
- 7 『対談と討論——日本民族と文化の源流と日本国家の形成』民族学研究13—3
- 8 吉井巖『崇神・垂仁の王朝』万葉86
- 9 『三』の尊重は、宗像三姉妹神・阿曇連祖神・墨江の三前の大神等水神・海神に多く見られる。あるいは天照大神等の三貴子。
- 10 「中」を良いとする発想は、この他にもイザナギの言葉「へ上つ瀬は瀬速し 下つ瀬は瀬弱し」とのりたまひて 初めて中つ瀬に墮り迎豆伎て漕ぎたまふ」にも見られる。
- 11 12 応神記では、応神妃として忍坂大中比売を生んだとされる迦具漏比売が、景行記の帝紀では倭建命の曾孫であり、景行妃として大枝王を生んでいる。また倭建命の系譜でも彼の曾孫及び息長真若中比売の孫で、やはり景行妃として大江王を生んでいる。

13 岸俊男「ワニ氏に関する基礎的考察」『律令国家の基礎構造』所収『日本書紀』では宇遲能和紀郎子は自殺とされており、この方がより現実的である。自殺に追いこまれたのである。

14 『日本書紀』によれば、皇極の母は「吉備姫王（島皇祖命）」という。

15 黒沢幸三『古代息長氏の系譜と伝承』文学33—12。大橋信弥『近江における息長氏の勢力について』日本史論叢8

16 『日本書紀』によれば、皇極の母は「吉備姫王（島皇祖命）」という。

17 吉備の伝承は、彼女を通して天武のもとに伝わったものも多いかと思われる。

18 建御雷神は、イザナミの子を斬ったイザナギの刀から発生しており、イザナギやイザナミが生んだ神々とは異なる登場場をしている。ニギハヤヒは、高天原神話には全く登場しない。

19 大國主が國主達の長であるように、大物主とは「モノ」の長、即ち被征服者＝死靈の長と解される。

他の参考文献

- 酒井弘『彦坐王小考』甲南大学紀要文学編32。田中日佐夫『古代近江の神話伝承』東アジアの古代文化5。田中巽『銅鐸とその祭祀氏族』東アジアの古代文化11。守屋俊彦『月立ちにけり古事記年報27』。本位田菊士『物部氏・物部の基盤についての試論』ヒストリア71。岩本次郎『古代吉備氏に関する一考察』ヒストリア26。伊東肇『角鹿・若狭の物語』立教高等学校研究紀要10。神田秀夫『古事記における仁徳グループと継体グループ』共立女子短大紀要1。森幸一『允恭の出自』専修史学7。吉井巖『イハノヒメの物語』関西大学国文学52・『王化の書』古事記に反権力の物語が多いのはなぜか』古事記日本書紀の謎。

補注

この系譜については田中巽氏の右記の論文を参照した。

次頁の系図は一部『日本書紀』で補足した。

